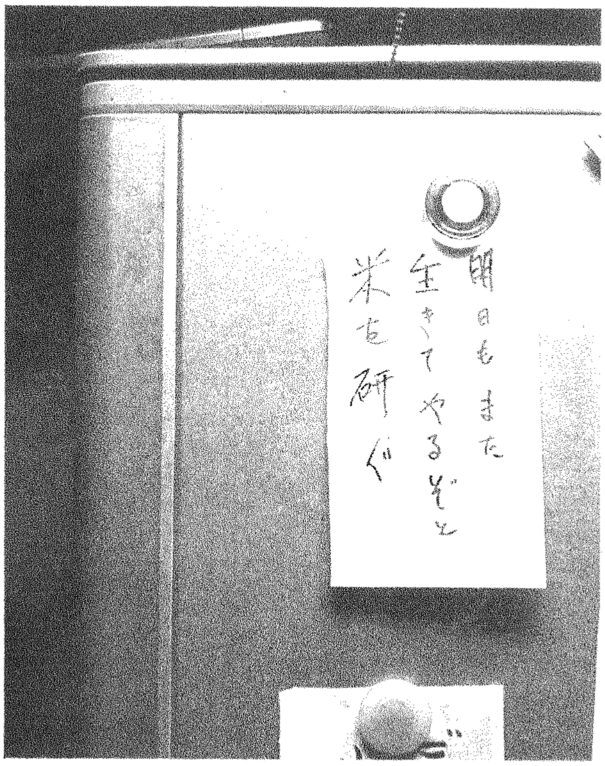
孤独死清掃業 5年で15倍

5000社超　家族の希薄化 背景

孤独死した人の自宅を清掃・消毒して原状回復する「特殊清掃業者」が急増している。業界団体によると、全国で５０００社以上が参入しており、団体が民間資格の認定制度を始めた5年前から業者数は15倍超に膨らむ。高まる需要の背景に、家族・親族関係の希薄化が浮かび上がる。【千脇康平】



「メモリーズ」が特殊清掃を請け負った大阪市内の一軒家には、孤独死した住人男性が記したとみられる張り紙が冷蔵庫の扉に残されていた＝同社提供

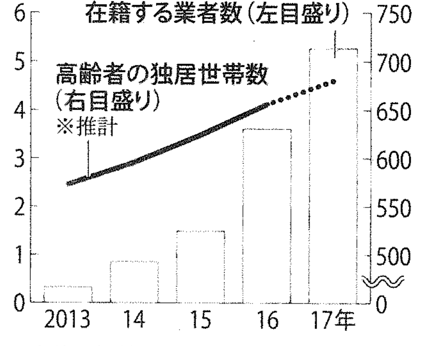
特殊清掃業者は故人の住宅の管理人や親族らから依頼を受け、清掃や消毒のほか、遺品整理を請け負うこともある。孤独死の場合、遺体発見まで時間が経過すれば、室内の臭いや汚れがひどくなる。業者は特殊薬品や殺虫剤、電動のこぎりなどを使って室内を原状回復し、感染症予防のため防護服を着て作業することも多い。

業界関係者によると、特殊清掃は一部のリサイクル業者や引っ越し業者が始めたが、近年は葬儀や廃棄物処理など幅広い分野の業者の参入も目立つ。

だが、悪質な業者による高額料金の請求や雑な作業を巡るトラブルも少なくない。業界の健全化を目指し、2013年に一般社団法人「事件現場特殊清掃センター」（本部・北海道）が設立された。

センターは民間資格「特殊清掃士」の認定制度を創設。遺族対応や質の高い清掃方法などを学び、試験に合格すると特殊清掃士に認定される。13年は資格取得者が在籍する業者は326社だったが、

民間資格の特殊清掃士が在籍する業者数と高齢者の独居世帯数の推移



※事件現場特殊清掃センターと厚生労働省の資料を基に作成

部屋に満つ 声なき叫び

業者「こんな最期 切ない」

近畿地方を中心に特殊清掃を請け負う「メモリーズ」（堺市）の横尾将臣代表（49）には忘れられない現場がある。

大阪市内の一軒家で8年前、住人の60代男性が風呂場で孤独死した。疎遠だった親族からの依頼だった。

台所や居間には食べかけのコンビニ弁当が散らかっていた。近所付き合いも避けていたという男性。冷蔵庫の扉には、自分に言い聞かせるように黒色のペンで書かれた張り紙があった。「明日もまた　生きてやるぞと　米を研ぐ」

横尾さんは「生きようとしていた形跡を目にすると、こんな最期しかなかったのかと切なくなる」と嘆く。

同社には毎月１５０件近い依頼があり、その数は約10年前の15倍に上る。

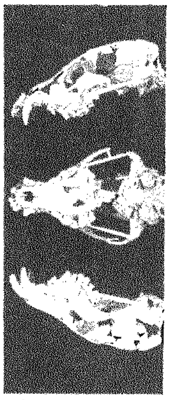
「クリーンメイト」（大阪市生野区）の西村訓典社長（35）も半年前、高齢女性が孤独死した大阪府内の自宅を特殊清掃した。依頼主は関東地方の息子だった。ギャンブル好きの父親と仲たがいし、20年前に家を飛び出して家族と疎遠だった。

電話台の棚から、先に亡くなった父親の言葉を妻の女性が書き留めたノートが見つかった。「（息子に）悪いことをした。もう一度会いたかった」。だが、息子は「家族とは縁を切った」と告げ、室内に残されていた百十数万円の現金だけを受け取った。

西村さんは「どんなに疎遠でも、故人は家族のことを思って生活していたはず。思いがこもった遺品を届けるのも仕事だが、親族から拒まれることも少なくない」と話した。【近藤大介】

と

になっていたが、2011年に慶大の収蔵庫で見つかった。慶大の佐藤孝雄教授（動物考古学）を

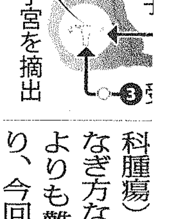


上黒岩岩陰遺
内最古の埋葬
上あごを横か
と横から撮影
右側が２匹目
学考古学研究

的課題は解消された」と述べ、国内初となる人の子宮移植の臨床研究計画を年内に学内倫

している。その一方、心臓や肝臓のように生命維持のためではなく出産目的で臓器を移植

サルの
※慶



科腫瘍）は「血管のつなぎ方など技術的に人よりも難しい面もあり、今回成功したこと